

MOMOにつき

MOMOの入り口に 網戸がつかました！

★6月15日のできごと

網戸を取り付けてくださったのは何とつどの広場♪ハーモニー♪参加者おんちゃんのおじいちゃんとおばあちゃん。先日MOMOにきてくださってこのお話がとんとん拍子にまとまりました。嬉しいね。



MOMOの木の扉にとっても雰囲気ぴったりの網戸、愛情もたっぷりです。

知多の郷土菓子、編み笠饅頭

★6月20日のできごと

南知多の山下文子さんに知多の郷土菓子“編み笠饅頭”を教えていただきました。

さるとりいばらの葉に包まれて蒸しあがったお饅頭はとてもいい香り。

昔は田植えが終わるとお疲れ様、ありがとうの気持ちにそえてみなさまにふるまっていたお菓子だそうです。早速、出来たての編み笠饅頭をほおばるとほっこりと温かくやさしいお味に思わず笑顔になってお話も弾みました。



まちの縁側MOMO (マチノエンガワ MOMO)
日々の動きがわかるよ。
まちの縁側MOMOブログ<http://86862469.at.webry.info/>

大久保康雄の風の記憶

この世界の片隅に

この史代さんの最新作『この世界の片隅に』を読んだ。このさんと言えば、映画にもなった『夕凧の街 桜の国』で著名な漫画家さんだ。『夕凧の街 桜の国』も原爆投下後の広島と、原爆によって亡くなった人々や、原爆の記憶によって苦しめられ、いつ発症するか解らない原爆症に怯える人々、それでも現在を力強く生きようとしている人々を描いた感動作であるが、新作の『この世界の片隅に』も、やはり戦争中の広島と軍港でもあった呉に暮らす人々の生活を描いていて、これまたじわじわと心に来るのである。

主人公は広島で家族と平穏に暮らす少女のすず。すずは絵を描くことが好きで、いつもぼんやり考え事をしてはヘマをやり、兄や妹にからかわれていた。そんなすずにも初恋の相手が現れる。クラスで一番の嫌われ者の水原。しかし、水原は戦争の犠牲になった兄の後を追って海兵隊に入隊し、すずも請われて呉の北條家に嫁に行く。すずの呉での新しい生活が始まった。しばらくして戦地に赴くという水原が、すずを訪ねて来る。別れの時、すずに向かって水原が言う。

「この世界で普通で、まともになってくれ」と…。戦争は物理的に街を破壊し、人が殺しあうだけではない。人の心までも変貌させる。国家のため、国民を護るためという美名を着せられ、人が自分と何の関係もない人を殺し、また殺される。平穏な世であれば決して行わないだろう非人道的行為を、平然と行う。日常的にそういうことが繰り返されていると、それがあたりまえのように思えて来るのだ。感情が摩耗し、悲しみの感覚が鈍化してゆく。そんな人の世の有り様は、どこか歪んで病んでいるのだ。そんな歪んだ世界の片隅に普通の感覚でいることは何と難しいことだろうか？

このコミックの時代背景は確かに戦争中だけれど、すずに向かって言った水原の言葉は現代の私たちにも突きつけられている言葉ではないか？ 世の中が平和だということは、個人の人としての尊厳や意思が護られ、自分らしい生き方が出来ているということなのだ。



大久保康雄 (オオクボヤスオ)
まちの縁側育くみ隊の理事であり、紙芝居集団・風穴一座座長を務めるなど、多種多様な顔をもつチェアウオーカー



今月のウイングのウイング 台湾の縁側ーバダウシ

この1年間、国立台湾大学の客員教授として月1回台湾通いをした。大学院ドクターコースの「環境計画実習」の科目にかかわった社会人院生と若手院生たちは、台湾社会の未来をになう「六賢人会議」と呼ぶにふさわしい誠にすぐれたメンバーであった。

研究実践対象は、原住民の居住地再建設を住民主体ですすめる創造的プロジェクト。かの国には約2%の原住民が今も都市部では河川敷等に家々を自主建設して住んでいる。行政は彼らの住む家を一網打尽にし、不法占拠者として追い出し、堅苦しいRCの国営住宅に押しこむので、彼らをそれをいやがり、そこから逃げだし、また元の河川敷での自主建設に至るといった「イタチゴッコ」が繰り返されるという現状がある。

台湾大学の夏教授は長年、社会問題としての原住民居住地問題の積極的解決策を行政と住民にはたらきかけてきておられた。小生が呼ばれたのは、こうしことを背景にしつつ、台湾の原住民居住地再建設にコーポラティブ方式の応用展開を理論的・実践的にはかり、大学・住民・行政の三者がそのことに身を乗り出す状況づくりの支援であった。結果的に台湾大学院生の八面六臂の活躍と創造的調査とオリジナル提案、台北市南部の溪洲部落住民の自主再建設に向けてのやる気満々の育みと合意形成、台北県政府の勇気ある新政策実行の決断と庁内世論形成が結合し、夢のような出来事がおこった。

スーパー堤防の上に原住民居住地再建設用地を無償確保、住宅建設費の公的補助、台湾大学による配置計画と住戸設計提案、住民によるセルフビルド等が進行することになった！

ところで、現状の阿美族の溪洲部落の40戸の住戸群配置は、絶妙な路地を介在させた超絶技巧レイアウトである(図)。そこには、路地のぶつかったところや家々のポーチのはり出し部分や、家々の玄関前余地などには、人々がサンサンゴゴ集まり共に食べあい談笑がひろがる柔らかい居場所が形成されている。そのような人々の出会いの場所を彼らは「バダウシ」と呼ぶ。



ぶ。バダウシには、朝も夜も共にご飯にありつけるコモンミールの場合、子どもからお年寄りまでがポーっとたたずみ、ひとりひとりの生きるリズムを大切にしつつ、お互いにのびやかに楽しみあえるくつろぎの場など多様な「エンガワ」がある。「バダウシ」は台湾の「エンガワ」である。

夜おそくまで集会場でワークショップがあった後は、このような「バダウシ」にいくとおいしいラーメンがふるまわれたり、時には「モモンガの姿煮(?)」の鍋が出てきたりする。阿美族には貴重なお客さんがきた時にモモンガのまるごとをごちそうとして客に出す習慣があるが、流石に「空とぶリス」といわれるモモンガの頭にかぶりつくことはためらわざるをえなかった。でも羽根のつけ根部分は結構おいしかった。

ご縁に恵まれてのこの1年の台湾体験は、まるで縁起絵巻のような驚くべき出来事の連続であった。最高に触発されることの多い楽しい1年であった。謝々。



延藤安弘 (エンドウヤスヒロ)
NPO法人まちの縁側育くみ隊代表理事。愛知産業大学大学院教授。錦二丁目まちの会所・世話人代表。

